

# 障害のある子を産み・育てることに対するイメージの生成 (第2報)

—S県東部M地区における住民調査報告—

八藤後 忠夫\*・鈴木(田中)円火\*\*

## A Report of the Investigation into the Actual Conditions Concerning the Image to Birth and Child Care of Children with a Disability

Tadao YATOUGO, Madoka SUZUKI-TANAKA

### I 第1報の要旨

育児以前の問題としての出産ならびに、特に障害のある子を産み・育てることに関して女性がどのようなイメージを抱いているのかという点に着目した。S県M地区を中心とした関東南部に居住する、20歳から50歳までの女性125人を調査対象とした。この住民訪問調査にあたっては、筆者ら2名の他に、文教大学教育学部特殊教育専修に在籍する6名の学生が行った。

「障害のある子を産み・育てること」に関する困難性イメージを従属変数、「障害児・者観」「子育て観」「家族像」「障害児・者との接触体験」「出産に関する知識や情報」を独立変数群として設定した。変数間の関連を単相関係数により解析した結果、困難性イメージの生成要因として次のような傾向が推察された。詳細は第1報を参照されたい(田中・八藤後、2006)。

1) 全体的には「困難性のイメージ」は、『家庭内での日常生活動作(ADL)』、『戸外での活動』、『社会への参入・参加』の3領域に分布していることが確認され、特にこの傾向は高年齢群(36～50歳)において顕著に示された(表1-1)。

2) 「困難性イメージ」と「喜び・生きがいイメージ」において、20～35歳グループでは、「困難性が高い」とイメージしている女性ほど「喜び・生きがいイメージ」が低い傾向が示唆されたが、36～50歳グループではその反対の傾向が示唆された(表2-1～表2-4)。

### II 第2報における目的と方法

第1報で得られた傾向の中から特に、困難性イメージを生成させていると思われる要因を重回

\* やとうご ただお 文教大学教育学部

\*\* すずき(たなか)まどか ユニマツ不動産・スパ&エステ事業部

表1-1 困難性イメージに関する項目間の関連（相関行列）

(全体)

	起床	着替え	洗面	食事	排泄	移動	入浴	睡眠	学習	運動	遊び	就学	就職	対人関係
起床	1.000	.456***	.575***	.369***	.377***	.286***	.324***	.357***	.118ns	.176*	.312***	.097ns	.111ns	.182*
着替え		1.000	.762***	.726***	.638***	.474***	.547***	.203*	.307***	.219**	.151ns	.254**	.311***	.249**
洗面			1.000	.727***	.641***	.464***	.479***	.226**	.309***	.190**	.204**	.215**	.256**	.229**
食事				1.000	.744***	.522***	.603***	.193*	.423***	.303***	.244**	.311***	.399***	.312***
排泄					1.000	.614***	.740***	.238**	.346***	.271**	.208**	.370***	.470***	.319***
移動						1.000	.637***	.238**	.402***	.327***	.251**	.361***	.384***	.358***
入浴							1.000	.330***	.317***	.315***	.298***	.310***	.410***	.305***
睡眠								1.000	.206**	.218**	.441***	.239**	.195**	.238***
学習									1.000	.583***	.392***	.533***	.572***	.543***
運動										1.000	.555***	.494***	.418***	.358***
遊び											1.000	.471***	.313***	.448***
就学												1.000	.635***	.492***
就職													1.000	.517***
対人関係														1.000

Kendallの順位相関係数

\*\*\*p<.001 \*\*p<.01 \*p<.05

表2-1 困難性イメージと「家族の絆が強くなる」の関連

n=125

	全体	20～35歳	36～50歳
・遊びの困難性	-.117ns	-.257*	.048ns
Kendallの順位相関係数			* p<.05

表2-2 困難性イメージと「小さな成長に大きな喜びを感じる」の関連

n=125

	全体	20～35歳	36～50歳
・遊びの困難性	-.101ns	-.272*	.050ns
Kendallの順位相関係数			* p<.05

表2-3 困難性イメージと「いつまでも「自分の子」という意識をもって育てられる」の関連

n=125

	全体	20～35歳	36～50歳
・遊びの困難性	-.073ns	-.124ns	.262*
・排泄の困難性	-.038ns	-.154ns	.234*
Kendallの順位相関係数			* p<.05

表2-4 困難性イメージと「障害をもつ人と共に生きるのも味のある人生だ」の関連

n=125

	全体	20～35歳	36～50歳
・遊びの困難性	-.128ns	-.296**	.063ns
Kendallの順位相関係数			** p<.01

帰分析によって推測・特定することを目的とする。そのために順位尺度による変数の全てを数量化した。この連続変量への変換にあたっては、各変数の度数分布から1つのカテゴリーに著しい偏りの確認された変数を解析対象から除外した。推計学的有意水準は、危険率5%を基準とした。なおデータの解析は、SPSS14. OJ for windows ソフトパッケージを使用した。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 従属変数の設定

困難性イメージに関する変数、「起床」「着替え」「洗面」「食事」「排泄」「移動」「入浴」「睡眠」「学習」「運動」「遊び」「就学」「就職」「対人関係」の14項目は、1～5の順位尺度カテゴリーで構成されている。度数分布における著しい偏りがなかったためこれらの変数を全て得点化し連続変量に変換した。14項目の各得点は以下のとおりとなった(表3)。この14項目から3.50以下の低得点傾向を示した「起床・洗面・睡眠・遊び」4項目を除く10項目の合計得点を「困難性イメージ得点」とした。この得点は理論上、最小値10から最大値50の間に分布する。

また、合計得点を構成する10項目の内的整合性をCronbachの $\alpha$ (アルファ)係数により確認した結果、.888が示され従属変数としての妥当性は保証されていると判断した(表4～表5)。第1報の記述統計量で確認された困難性イメージの分布の内、特に「就職」「学習」「就学」に関して高い得点が示された。日常における「移動」「入浴」「着替え」の困難性イメージよりもさらに高い傾向であった。幅広い年齢層の女性にとって障害のある子を育てることの困難性は、結果的には障害のある子が学習・就学・就職というライフイベントを経て経済的・生活的自立へ向かうことの困難性イメージに連動することを予測させる。

表3 従属変数14項目の各得点

項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
1) 起床 (除外)	124	1	5	3.05	1.058
2) 着替え	123	1	5	3.72	.825
3) 洗面 (除外)	122	1	5	3.50	.836
4) 食事	123	1	5	3.77	.818
5) 排泄	124	2	5	3.82	.787
6) 移動	124	2	5	3.82	.807
7) 入浴	124	2	5	3.76	.820
8) 睡眠 (除外)	124	1	5	2.97	.845
9) 学習	124	2	5	3.90	.831
10) 運動	124	1	5	3.72	.916
11) 遊び (除外)	124	1	5	3.01	1.048
12) 就学	124	1	5	3.87	.874
13) 就職	123	2	5	4.19	.728
14) 対人関係	124	1	5	3.69	.923

# 有効ケース数 (リストごと)

表4 困難性イメージ得点

n=122

項目	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
困難性イメージ得点	122	25.00	50.00	38.32	5.86
# 有効ケース数( リストごと ) # 最高得点/50、最低得点/10					

表5 困難性イメージ得点の内的整合性と信頼性

n=122

	平均値(ラン検定)	最小値	最大値	範囲	最大値/最小値	分散	項目の数
項目平均値	3.83	3.69	4.19	.500	1.14	.02	10
項目間の相関	.433	.192	.775	.583	4.03	.03	10

## 2 独立変数群の連続変数への変換

従属変数と同様に、年齢を除く独立変数の全ては順位尺度(5のカテゴリー値)で構成されている。この尺度を連続変数に変換するため、変数ごとのカテゴリー分布を確認し、線形的な分布が保証されない変数を独立変数から除外した。その結果、困難性イメージ得点の背景要因となる項目(独立変数/説明変数)は42項目(変数)となった。

連続変数化された調査項目(独立変数=42)

- 1) 基本属性(2)：本人の年齢、同居人数
- 2) 家族像や子育て観(12)：夫婦の支え合い、食事づくり協力、掃除協力、洗濯協力、専業主婦志向、参考書の利用度、子育て不安度、育児における夫婦の協力度(おむつ替え・お風呂入れ・寝かしつけ・送り迎え)、育児の母親責任度
- 3) 障害児・者観(10)：「可哀想」「怖い」「心優しい」「暗い」「正直」「気味悪い」「危険」「暴力的」「純粹」「可愛い」
- 4) 障害や出産に関する知識(14)：LD、ADHD、肢体不自由、CP(脳性マヒ)、情緒障害、行為障害、筋ジストロフィー、統合失調症、超音波診断、絨毛検査、胎児採血、MRI、受精卵診断、母体血清マーカー試験
- 5) 障害児・者との接触体験(1)
- 6) 出生前診断に関すること(3)：診断経験の有無/ダミー変数、診断希望、診断の賛否

# 対象者の内、障害児・者との同居者は8人(全体の6.7%)であるが、少数のため「同居の障害児・者の有無」の項目も独立変数から除いた

## 3 困難性イメージへの影響要因

重回帰分析の結果、以下のような傾向が得られた。なお、独立変数間においては、許容度ならばVIF(変動インフレーション因子)の数値結果から多重共線性は認められなかった。

### 1) 困難性イメージ全10項目得点の背景要因

第1報の記述統計では「困難性のイメージ」は、『家庭内での日常生活動作(ADL)』、『戸外で

の活動]、『社会への参入・参加』の3領域に分布していることが確認されている。特にこの傾向は高年齢群（36-50歳）において顕著に示された（表1-1）。しかし、重回帰分析の結果によれば、困難性イメージへの年齢による影響は確認されなかった。

困難性イメージ得点10項目に影響を及ぼしていると思われる要因はまず、障害児・者観の領域においてその傾向が示された。「可哀想である」（ $\beta = .365, P < .01$ ）と「危険である」（ $\beta = .363, P = .059$ ）の2項目である。その傾向と連動して「可愛い」は有意に負の相関を示した（ $\beta = -.297, P < .001$ ）。つまり、障害児・者への「同情・否定」的な捉え方が「肯定」的な捉え方以上に困難性のイメージを高めていることを推測させる。しかし、この傾向から、女性一般が障害児・者への理解が不足していると判断してはならないであろう。子を産む「主体」であり育児に深く関わる女性にとって、このような「同情・否定」的障害児・者観は極めて現実的・生活実体的な感覚であると推察される。問題とすべきことは、これらの「同情・否定」的障害児・者観を産み出しているその背景の検討であると考ええる。

次に「本人の子育ての関する不安」（ $\beta = .191, P = .107$ ）と「夫婦間での支え合う」家族像（ $\beta = .204, P = .089$ ）が、やや困難性イメージに影響している傾向が窺われた。一方、障害の知識（LD=学習障害）の高さは負の相関を示し一要因として推察されるが有意確率ならびに単相関係数から判断すれば、大きな要因とは言えない。

なお、これらの要因に関しては、調整済み決定係数の低さからも困難性イメージに対する明確な影響要因として大きく寄与しているとは思われない（表6）。

表6 困難性イメージ得点への影響影響要因（領域全体）

n=100

独立変数	標準偏回帰係数( $\beta$ )	有意確率	単相関係数 (r)	有意確率
①夫婦間での支え合い	.204	P=.089	.188	P<.05
②本人の子育て不安	.191	P=.107	.198	P<.05
③障害児・者観「可哀想」	.365	P<.01	.427	P<.001
④障害児・者観「危険」	.363	P=.059	.306	P<.01
⑤障害児・者観「可愛い」	-.297	P<.05	-.345	P<.001
⑥障害の知識 (LD)	-.329	P=.071	.038	n.s

重相関係数 R=.763 決定係数K・R2乗（調整済み）=.583 (.275)

# LD=学習障害

## 2) 困難性イメージ全10項目の内、「家庭内ADL領域5項目得点」の背景要因

ここでは困難性イメージを「家庭内における日常生活動作（ADL）」に焦点を絞りその背景要因を検討する。まず、「夫婦で支え合う」家庭像が要因として有意に示された（ $\beta = .320, P < .05$ ）。また1)と同様に「可哀想である」という「同情」的障害児・者観が困難性イメージを高めている傾向が窺われた（ $\beta = .191, P = .133$ ）。また、障害の知識「ADHD」（ $\beta = -.371, P = .071$ ）と出生前診断「あり」（ $\beta = -.227, P = .101$ ）との負の相関も窺われた。これらの諸要因に関しても、1)と同様に、調整済み決定係数の低さから困難性イメージへの影響要因として特定することは避けるべきであろう（表7）。

表7 困難性イメージ得点への影響要因（家庭内ADL領域）

n=100

独立変数	標準偏回帰係数( $\beta$ )	有意確率	単相関係数(r)	有意確率
①夫婦間での支え合い	.320	P<.05	.263	P<.01
②障害児・者観「可哀想」	.191	P=.133	.311	P<.001
③障害の知識(LD)	.393	P<.05	.037	n.s
④障害の知識「ADHD」	-.371	P=.071	-.053	n.s
⑤出生前診断「あり」	-.227	P=.101	-.047	n.s

重相関係数 R=.722 決定係数K・R2乗(調整済み)=.521(.168)

# LD=学習障害, ADHD=注意欠陥多動性障害

## 3) 困難性イメージ全10項目の内、「家庭外ADL・社会参入領域5項目得点」の背景要因

1) 2)と同様に、「可哀想である」という「同情」的な障害児・者観が最も大きく困難性イメージの高さに影響を及ぼしていることが示唆された( $\beta=.437, P<.001$ )。同様に、「暗い」( $\beta=.193, P<.01$ )、「危険である」( $\beta=.527, P<.01$ )という「否定」的な障害児・者観の影響が強く示唆された。特に「危険である」に関しては顕著に示された。この傾向に連動して、「可愛い」という「肯定」的な障害児・者観と有意に高い負の相関が示された( $\beta=-.378, P<.01$ )。このことは、困難性イメージの内、家庭外での行動や就学・就職といった「社会への参入」に関して、障害児を産み・育てることへの現実的な厳しさがイメージとして存在することを推測させる。この傾向は、「超音波断層法」という出生前診断の知識の高さ( $\beta=.356, P<.05$ )と関連しているとも考えられる。

なおこの領域に関する諸要因は、調整済み決定率からも独立変数群の寄与率が保証されていると判断されよう(表8)。

表8 困難性イメージ得点に影響への影響要因（家庭外・社会参入領域）

n=101

独立変数	標準偏回帰係数( $\beta$ )	有意確率	単相関係数(r)	有意確率
①本人の子育て不安	.171	P=.101	.263	P=.068
②障害児・者観「可哀想」	.437	P<.001	.311	P<.001
③障害児・者観「暗い」	.193	P=.01	.037	P<.001
④障害児・者観「危険」	.527	P<.01	-.053	P<.001
⑤障害児・者観「可愛い」	-.378	P<.01	-.047	P<.01
⑥障害の知識(情緒障害)	-.387	P=.052	-.047	n.s
⑦出生前診断知識(超音波)	.356	P<.05	-.047	n.s

重相関係数 R=.817 決定係数K・R2乗(調整済み)=.667(.426)

# 超音波=超音波断層法

## IV まとめ

1) 困難性イメージは、日常における生活動作を中心とする領域よりも、就職・学習・就学とい

った障害児・者の将来における生活的自立領域により高くその傾向が示唆された。

- 2) この困難性イメージ傾向の背景として、「可哀想」「暗い」「危険」という「同情・否定」的な障害児・者観が影響を及ぼしていることが推察される。
- 3) しかし、それらの「同情・否定」的な障害児・者観は、子を産み・育てるという女性一般の、子を産み・育てることへの「主体的イメージ」に由来されると思われる。
- 4) つまり、3) のような障害児・者観のイメージがどこに起因するかという観点とその検討が必要であろう。
- 5) 女性一般は子を産む「主体」であるが、障害の有無にかかわらず子を育てる「主体」や「責任」が家族・地域・社会・国家のありようと密接に関わっていることは言うまでもない。

## V 本研究の限界と今後の課題

本調査は、障害のある子を産み・育てることに対して妊孕力のある女性一般がどのような困難性を抱いているのかということ「イメージ」から検討したものであり、困難性の実態を把握するものではない。しかし、障害児・者に関する様々な「誤解」「偏見」「差別」等は不明瞭なイメージに由来する側面をもっているとも考えられよう。障害児・者に関する「理解」に関してもまた同様であると思われる。

統計解析にあたり、尺度の連続変量への変換を行ったため重要な独立変数が除外され、困難性イメージの背景要因を明確に特定するには至らなかった。このことは、「産むこと」と「育てる」ことを1つの従属変数として合算したことの影響が大きいと思われる。焦点を絞り込んだ独立変数を設定し、その背景要因を検討する調査モデルを今後、再構築したい。

なお第1報では、論文題目に「障害“をもつ”子」という形容を用いたが、近年のノーマライゼーションの流れに則し、本稿では「障害“のある”子」という形容に改めた。

### 文献資料

- ・ 田中円火・八藤後忠夫（2006）：障害のある子を産み・育てることに対するイメージの生成（第1報）—S県東部M地区における住民調査報告—、生活科学研究第28集、pp.181-194、文教大学生活科学研究所
- ・ 以下、略（第1報を参照されたい）